

「出る杭は打たれる」だけだろうか

アメリカや中国でのト

ヨタ自動車のリコール問題に関連して、「日本の品質が問われている」との論調がジャーナリズムを賑わしています。この問題を少し違った観点から考えてみましょう。

「トヨタがGMを抜いて、世界一の自動車メーカーになったので、風当たりが強くなった」といったところがあるにしても、論点が枝葉末節にしか見えません。

グローバル調達により、品質管理が行き届かなくなったとの話もあります。が、根本の問題の本質は、少々違つて考えます。

品質は検査でなく製造時点で決まる

技術者であれば、「品質」は、製造された物を検査によって不適合品を

排除して確保するのではなく、物作りの段階で決まることは常識です。

実は、物づくりの前の、設計段階の思想が、品質を決める根本であり、その設計思想が均一で、安く作るという考え方に基づいた生産品質の部分に特化したのが、トヨタの「カイゼン」です。

設計思想が間違っていれば、生産段階での「カイゼン」をいくら積み重ねても、問題部分の本質的な品質向上には、つながらりません。

コスト削減による価格や、燃費に特化した競争上の優位のみで突っ走った筈（とが）が、今回のリコール問題の本質と考えます。

クルマの基本は走る・曲がる・止まる

クルマの基本は、「走る」「曲がる」「止まる」です。そんなことは当たり前と思われる人が大半でしょう。

しかし、この3点の安

「品質」は何によって決まるのか

全性よりも、燃費向上の方をトヨタは優先したのではないのでしょうか。

トヨタはガソリン価格の高騰を受け、燃費が良いことがエコであり、環境にも財布にもやさしいとアピールして販売台数を増やして来ました。

どうしてそんなことが言えるのかと思われるでしょうが、数年前に、中



央高速での大破事故を起した私自身の経験から、そう断言できるのです。

一言にまとめると、「トヨタのオートマティック車は、エンジンブレーキが効かず、速度を一定に保つオート・スピード・コントロールは、下り坂で設定速度を大幅に上回っても加速し続ける」からです。

目の錯覚もあって、ときには誤ることがあります。

私は、前にクルマがないと、スピードを出し過ぎる傾向にあるので、速度違反を起さないように、オート・スピード・コントロールを利用して

いたのですが、下りカーブを曲がり切れず、ガードチェーンに接触して、クルマを大破させてしまいました。幸い、ケガは

トヨタ自動車リコール問題から考えてみよう

なにわの漢方薬3代目主人

連載19

無かったのですが、それ以降、私なりに研究して、分かったのです。

トヨタ車とドイツ車を比べてみると

ドイツ車と比較すると、ドイツ車のオート・スピード・コントロールでは、下り坂では自動的にシフトダウンが行われ、エンジンブレーキがかかって、設定速度を大幅に超過することはありません。

また、通常のオートマチック車のドライブ走行であっても、下り坂でアクセルペダルから足を離すと、エンジンブレーキがかかるようになって

います。また、カーブでハンドルを切った場合、タイヤが左右ともに踏ん張る方向に傾くので、外側に流

されることなく、高速のまま、安全に曲がれます。

医療も設計思想に規定されてしまう

トヨタの問題を、他山の石として学ぶべき教訓は、「品質はその設計思想に規定されてしまう」ということです。

現在の日本の医療は、一日というより一秒でも寿命を延ばすことにあります。安楽死が認められていないことから分かるとおり、人としての尊厳や、むごい苦痛からの解放よりも、あたかも、この世に生存する時間を延ばすために医療資源を投入するのが正しいとの前提に立っています。

死亡原因のリスク低減を図ることが、「品質の目標」とされるので、その時点で可能な検査を行い、その正常値におさまるよう薬物を投与し、その

投与によって引き起こされる副作用・不具合に対する薬物の追加投与が行われます。ときにはQOLが著しく低下することもあります。

血液検査数値については、プリントしたものを患者に手渡すことが行われるようにはなっていないが、その他の情報は担当医が独占しますので、処方適否について第三者には評価できない仕組みです。だから、前回（本紙3月17日号）の「資格」

の基準書の記憶の話に戻ると、「標準的医療行為の中での裁量幅のある処方の決定」「イコール「投薬」となります。

医療において、医師の処方権は不可侵とされまので、その投薬は、保険適用の範囲であるか否かしか、チェックされません。

どのように推移したかが確認できるような電子カルテ・システムが普及すれば、その服薬状況を含めて、効果判定が可能となりますが、医師・看護師・薬剤師の守備範囲の力に阻まれて、その統計学的な集計・解析は、進んでいません。

それが可能となれば、薬物治療における先発品とジェネリックの品質の差の評価を含め、相互作用による副作用や相乗効果、標準的治療についての、より優れた方法の確立がなされ、医療経済上も患者のQOLも、多大の利益がもたらされるものと考えます。

国民の健康を考えると、医療的処置（投薬）のみならず、生活習慣（食生活や運動などの養生を含めての）基本的な思想を明確にした上で、「百年先の計」を立てる必要があるのでは、ないでしょうか。（永井達夫 東洋漢方製薬代表取締役社長）